「寺田寅彦の銅像」除幕式等の報告

山本　健吉

7 月 24 日（火）午前 10 時 50 分より「オーテピア高知図書館」の開館に合わせて、5 年越しの銅像の除幕を迎えることができました。皆様方からの浄財（総額 10,316,735 円）をいただきまして建立することができました。改めて感謝を申し上げます。

除幕式（7 月 24 日（火））

当日は、70 名を越える方々が集まっていただき、「寺田寅彦の銅像を建てる会」の青木章泰会長、岡﨑誠也高知市長の挨拶、そして、銅像制作者大野良一様の紹介、続いて、岡崎市長から青木会長に「感謝状」の贈呈が行なわれました。最後に、銅像を覆っている白い布を行政等の方々と親族や江ノ口小学校の子ども達により紅白の紐が引かれ「ねえ君、不思議だと思いませんか」「天災は忘れられたる頃来る」と呼びかけている寺田寅彦博士の銅像の除幕が行なわれ、優しく呼びかけている寺田寅彦博士にお目にかかることができました。

表彰状

寺田寅彦の銅像を建てる会
会長　青木章泰　様

貴団体は寺田寅彦博士の業績を顕彰するため銅像を建立され本市に寄贈されました
このことは本市における科学文化の発展に多大の貢献をするものであります
ここにそのご厚志に対し深く感謝の意を表します

平成三十年七月二十四日
高知市長　岡崎誠也

青木章泰寺田寅彦の銅像を建てる会会長の挨拶

おはようございます。大変熱い中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。

本日は、岡﨑市長、そして、高木高知市議会議長様をはじめ、寺田寅彦先生のご関係の方々11名を含めまして、この除幕の挙行式にお集まりいただきまして、心から感謝を申し上げます。

今年は、寺田寅彦先生生誕 140 周年の年ですが、明治 11 年 11 月 28 日にお生まれになっておられます。そして、何とこの母校の追手前高校の創立記念日が明治 11 年 11 月 19 日創立 140 周年であります。もうひとつおまけでいえば私が勤めております四国銀行の第37国立銀行の創立記念日が明治11年10月17日であります。いずれも 140 周年を迎えます。非常におめでたいことだと思います。

この銅像の建立にあたりましては、寺田寅彦の銅像を建てる会を結成いたしまして、募金活動をしてまいりました。高知県内の皆様や寺田寅彦先生の県内外のファンの方々のご寄附をいただきまして 10,316,735 円集まりました。本当に貴重な浄財をいただきましたことで、この銅像と余剰金を高知市に寄贈いたします。

何よりも、友の会の山本会長様には事務局として非常にご努力をいただきましたこと、宮副会長、宮﨑幹事をはじめ、多くの方々にご尽力をいただきましたことで銅像が完成できました。今日は、お出でになられておられませんが、高知新聞社の元社長様の橋井昭六様には、いろんな意味でアドバイスをいただき、感謝を申し上げます。

この銅像の制作は、大野良一先生にお願いいたしました。県展の彫塑の部で最短で無鑑査になられた方でありまして、今全国でいろんな会に出品され、著名な方でございます。本当にありがとうございます。

4 年間にわたりご労苦をおかけしました。この銅像は、芸術的な価値はもちろんのこと、その上に寺田寅彦先生がどんな思いで発信をしようか、その思いを込めた、思い入れがある銅像でございます。ぜひ十分にご覧になっていただきたいと思います。

そして、このオーテピアの場所、ここに建立されたという事には、大きな意味があります。何よりも母校を向いております。その上に、このオーテピアそのものが、未来の科学館、つまり科学をする場所でもありますし、もちろん拠点の図書館でもあります。ご存じのように寺田寅彦先生は、科学者でもありますし、随筆家でもあります。つまり文理融合の先生でもあり、いわば日本のレオナルド・ダ・ビンチに相当する方でございます。そういう意味で、この場所にあるということはいろんな意味で最適な場所ではなかったかなと思います。この英断には、岡﨑市長様に随分お世話になりました。感謝を申し上げます。そして、この台座文字でございますが、依岡紫峰先生によります「ねえ君ふしぎだと思い

ませんか」という文字、依岡先生は、昨年 10 月 15 日にお亡くなりになりましたが、非常に優しい文字で書かれています。

それから、もうひとつそばには、「天災は忘れられたる頃来る。こちらは、牧野富太郎博士の直筆の文字を彫ったものでございます。是非ご覧になってください。そしてこちら側には、寺田寅彦先生の直筆ローマ字を刻んでいます。何と書いているかと言いますと、「好きなもの　苺　コーヒー　花　美人　懐手して宇宙見物」と書いてあります。まあ、今で言えば、「ねえ先生、今日はプラネタリウムと図書館を見物してください」と言う呼びかけをしているというような気持ちになります。

この場所にあるということは、寺田寅彦先生が「高知は、お酒やカツオのたたきだけではない。科学をする心もあるよ」「随筆の心もあるよ」とそういうことを県内外にアピールする絶好な銅像だと思います。それと同時にここにあるということは、日曜市が毎週開かれますし、来月行われますよさこい祭りも十分楽しんでいただきたいという思いでおります。

いろいろ申し上げましたけれども、ご参会の皆様方には、この建立に際しまして、大変お世話になり、立派に完成することができました。心から御礼を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

岡﨑誠也高知市長の挨拶

ご紹介をいただきました高知市長の岡﨑誠也でございます。

いよいよ、もうすぐオープンになりますが、寺田寅彦先生の生誕 140 年の記念の年にすばらしい銅像がここに創立されましたことを我々大変感謝申し上げますとともに、多額のご寄附を実行委員会の皆様方が歩き回られて多くの浄財を集められましたことにも、青木会長はじめ多くの皆様方に感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

寺田寅彦先生は、地震の関係とか様々な論文を残されておられますけれども、また、寺田寅彦の研究会の方々もおられますが、いろんなことを知れば知るほど高知が生み出した天才だということを実感いたします。

寺田寅彦先生は、彫塑も美術も絵も音楽も一流の方です。一つの道を極めると全ての道につながるというのが、一つの天才の枠組みだと思いますが、本当にそういう方で、またこういう素晴らしい銅像を建立していただいた大元は大野良一先生で、素晴らしい銅像を作っていただきまして感謝申し上げます。

桂浜の坂本龍馬の銅像の所でいつも様々なイベントで出てまいりますシェイクハンドも大野先生の作品でもございまして、全国至る所で大野先生の作品が多くの方々に親しまれ

ておられまして感謝申し上げたいと思います。

寺田寅彦先生は、まだまだ高知県民の方々に知られていないことが沢山あろうかと思いますが、論文や随筆を読んでみますと非常に面白いものがございまして、わたくしもこの研究会の方々からいただいた冊子をみていると、秋口になりますと、たとえば、あんしんセンターとか高知城の中に銀杏の木がたくさんございますが、この銀杏は、同じ時期に葉っぱが一時に落ち、3日間程度で全部落ちてしまいます。

寺田寅彦先生はさすがですね、何故銀杏が同じ時期になると一斉に落ちるのかということを戦前の昭和８年２月発行の「鐵塔」に掲載された「藤の実」という随筆の中で書いています。

その理由が分ったのは最近だそうで、銀杏の中の DNA に組み込まれているということがこの 2・3 年の内で、DNA の解析が進み、葉が一度に落ちるように遺伝子の中にきっちりと組み込まれていることが分ったようです。

寺田寅彦先生はさすがで、読めば読むほど「ねえ君　不思議だと思いませんか」という言葉が先生の代表的な言葉になっていますが、いろんな論文を読めば読むほど素晴らしい先生だと思います。

本日、高知みらい科学館もオープンしましたが、たくさんの子どもさんが生物や科学など、様々な不思議の世界を科学館の方で学ばれると思いますが、そういう高知を代表する偉人でございますので、この場所に相応しい銅像がいよいよオープンしたことを感謝申し上げます。

まだまだ知られていないことが寺田寅彦先生にはたくさんありますので、私たち、特に高知市内の小・中学校の子どもさんに寺田寅彦先生のご功績をもっと広く分かっていただくように今後も教育委員会とともに取り組んでいきたいと思っています。今日は本当にありがとうございます。

イベント（7 月 25 日（水））

除幕式の翌日、本来は休館日ですが市教委に了承を求め開催しました。

はじめに宮寺田寅彦記念館友の会副会長に経過報告を兼ねて自筆されました「寺田寅彦銅像物語」をもとに講話をしていただきました。

そして、寺田寅彦が在籍した江ノ口小学校の田村和枝教頭様にオルガン演奏をお願いし小学校の雰囲気で「小さな世界」「ふじの山」と寺田寅彦作詞作曲の「三毛の墓」を参加者の方と斉唱しました。寺田寅彦とともに歌っているような心持ちがしました。

最後に銅像制作者大野良一様に「寺田寅彦像を制作

して」と題して講演をしていただきました。今回は、改めて銅像が完成をした時点での制作者からのお話としてお願いをしました。

宮副会長の講話「寺田寅彦銅像物語（主旨）」

「寺田寅彦記念館友の会」には、熱心な寺田博士ファンが集い合っている。名古屋の山田功さんはかつての国語教科書に登場していた寺田博士の作品を丹念に調べている。徳島の四宮義正さんは全国に残る寺田博士ゆかりの地を巡る研究を続けている。新潟の佐藤妙子さんは「『吾輩は猫である』に出てくる寒月先生が好きだから、モデルとなった寺田博士のことが知りたくて来ています」と･･･。また、長らく寺田寅彦記念館の管理の仕事に携わってきてくださった伊東喜代子さんは、遠来のお客様の満足を引き出す解説をしてくださっている。

遡れば、教育界の重鎮であった依光賢一郎さんを始め、寺田博士に関する著書も出された恒石直和さん、鈴木堯士さんの歴代会長さん。また、堀見矩浩さん、田村雄一さん、松下貞夫さん、菊地時夫さんの歴代事務局長さん。こうした役員さん方が紡いできた会である。鬼籍に入られた方も多くなったが、それぞれの時代に寺田博士の顕彰に務めてきた。最近では、会長兼事務局長の山本健吉さんによって会報の「槲」が充実してきた。また、田口保雄さんの尽力によりホームページも開設され、ネット上に情報を提供しつつある。その他、熱心な寺田博士ファンよって支えられている会である。

平成 24 年に「友の会」のメンバーが頭をひねって「どうしたものか？」と悩む場面に出くわした。手元に、朝日新聞（2000 年 10 月 3 日号）「この 1000 年の優れた日本の科学者」の読者人気投票の記事があった。それは、何と寺田寅彦博士の弟子であった中谷宇吉郎氏（世界的な雪の研究家）が第 6 位、恩師の寺田博士は番外の第 14 位という記事だった。そして「何故こうなったのか？」、「どうすれば寺田博士の偉大さをもっと多くの方々に認識していただけるのだろうか？」等の協議が延々と続いていた。みんなの気持ちは「せめて弟子の中谷博士よりも上の第 5 位くらいにもっていきたいなぁ。」といったところだったかと思う。（ちなみに、この記事では「第 1 位野口英世、第 2 位湯川秀樹、第 3 位平賀源内」となっていた。）

ここで、寺田博士が「ノーベル賞」を貰い損ねた話を紹介しておきたい。大正年間の始め頃、博士は「ラウエ映画の実験方法及其説明に関する研究」をまとめて論文として発表すべく、科学雑誌「ネイチャー」へ原稿を郵送していた。しかし、当時は船便であり、おそらく先方へ届くまでに 3 か月ほどかかったと思われる。しかも、修正などがあれば、ま

た3か月かかるということになる。つまり、何回か往復していると思うと半年か1年はかかっていると思われる。運悪く、同じような内容をイギリスのヘンリー・ブラッグとローレンス・ブラッグ親子が研究しており、彼らは1913年1月23日の日付で発表した。研究内容については、ブラッグ親子のテーマ「X線による結晶構造解析に関する研究」からご想像いただきたい。ブラッグ親子はイギリスに住んでいたから1時間くらいで論文が届いただろうことを思えば、彼らは地理的に圧倒的に有利であったことになる。(彼らは、これによって1915年のノーベル物理学賞を受賞した。) 寺田博士の研究は「ネイチャー」の同じ年(1913年)の4月号に掲載されている。イギリスと日本、地理的条件が同じであったら寺田博士のノーベル賞受賞が実現していたかもしれなかったといわれている。まさに、タッチの差のできごとであった。(これは平成29年度に「友の会」がお招きした熊本大学名誉教授の柏木濶さんの講演「寺田寅彦と熊本」でお伺いしたものである。五高時代に寺田博士が柏木さんのお宅に下宿していたこともあり、柏木さんは驚くほどの様々な資料をお持ちであった。なお、寺田博士は1917年にこうした研究の業績により帝国学士院恩賜賞を受賞している。)

ところで、「寺田博士の偉大さをもっと多くの方々に知っていただくためにどうしたらいいか?」の問いかけの真っ只中で、私はぼそりと「寺田博士の銅像を建てましょう。」とつぶやいた。これが5年間も続くことになる銅像建設運動のスタートだった。言い出しっぺの本人は気楽なもので、10年かかっても20年かかっても少しずつ寄付を募って、資金を蓄え、末永く運動を展開することがひいては寺田博士の業績を広めていくことにもなるだろう･･･などと勝手に考えていたのだった。

平成25年度の「寺田寅彦記念館友の会」の総会において「寺田博士の銅像を建設するための運動をすすめよう」という提案が正式に承認された。そして、運動の主体となる「寺田寅彦の銅像を建てる会」の結成を目指して準備が進められていくことになった。私たち(山本健吉会長、宮﨑嗣生幹事、私)3人は、高知新聞社の名誉顧問を務めておられる橋井昭六さんを訪ね、何度かご助言をいただくことにした。(宮﨑幹事は橋井さんと親しく交流があった。)最初に、橋井さんは(建設中であった)「高知県立高知城歴史博物館」の役を引き受けている事情もあり、「寺田博士の銅像建立については役を受けずに完成に向けて協力はさせていただく。」とのお言葉をいただいた。併せて、高知県・高知市の了承を取り付けること、また県・市の教育委員会への説明や県立文学館への説明、高知新聞社への協力要請、高知大学をはじめとする理学・科学関係者への働きかけ、高知追手前高等学校の校友会への働きかけ、さらに県民あげての取り組みとなるよう心を砕くように…等々のご示唆をいただいた。また、寺田博士に関しては「博士は多方面にわたって長けている方だ。地震に対する警告では第一人者であり、多くの警句を遺されてもいる。また、『学校が地震でつぶれるようなことがあれば国の恥だ』と書いて『災害に負けない学校づくり』等も提唱している」などのお話をいただ

き、大いに頑張るように激励をいただいた。

平成 26 年 5 月 1 日、ついに「寺田寅彦の銅像を建てる会」が発足した。会長に青木章泰高知商工会議所の会頭、副会長には高知県の経済界の方々に大勢お入りいただき、大船に乗ったような気分であった。なお、事務局長には山本健吉友の会会長が就任した。(私たちは事務局員となった。) 会の中で「寄付を募るからには、その寄付が税の控除の対象になるように手続きをきちんとすることが重要だ。」とのご助言をいただき、税務署との折衝が必要となった。この点については、すべてを山本事務局長があたってくださった。新聞報道にも取り上げられ、順風満帆の思いの中、平成 26 年 9 月に募金活動がスタートした。ところが、いざ募金はスタートしても、そう簡単には寄付金は集まらず、個人の募金を広くお願いして回ることが多くなってきた。各地の高知県人会、寺田博士の母校(追手前高校等)の校友会、高知県教職員友の会、退職教職員の会、理科や社会科の研究会、土佐史談会、思いつく範囲で次々とお願い文書を郵送する作戦に出た。

銅像の制作は、県展彫塑の部の無鑑査作家・大野良一さんにお願いした。若い頃から才能に恵まれ、連続して特選を受賞し、最短コースで無鑑査になった方である。最近では「シェイクハンド龍馬像」の制作にも携わられていた。銅像のポーズは、博士が若い研究者や学生たちに折に触れて声をかけていたという「ねえ君ふしぎだと思いませんか」を彷彿とさせるものを…との注文をつけさせていただいた。何度か仁淀川町のアトリエに通い、寺田博士像の試作品を見るにつけても「大野さんにお願いして良かった」という思いが沸々と湧いてきた。大野さんは彫塑に対する真摯な姿勢だけでなく、寺田博士を理解するために、寺田博士の随筆を次々と読破されていた。そこから大野さん自身の制作にまで大きな影響が出てきているのを私たちは後で聞かされることとなった。

平成 28 年度には、大野さんに友の会の講演を依頼した。「寺田寅彦先生の科学者の眼に学ぶ」と題して、寺田博士の銅像制作に取り組む中で「自分の彫刻が進化した」と感じた経過を語ってくださった。講演の中で「『ねぇ君、ふしぎだと思いませんか』と問いかける科学者の眼は、多くの人々が見落としたものを新鮮な驚きと興味を持って克明に見ているのです。これは芸術にとっても大事なことです。わかってはいても、改めて共感し実感しました。彫刻に科学者の眼を持ち込みました。克明な観察から見出される自然の成り立ちや摂理にはあいまいでない美しさがあります。これを作品にするには、この美しさの妙味を踏まえて、感性のフィルターを通して表現する意義を見出すことだと考えました。『藤の実』は、書斎のガラスをパチンと打った藤の実の弾けた章から構想を得ました。誰もが見落とすものに、眼を開かせてくれました。(･･･中略･･･) たくさんのご教示をいただいた先生への恩返しも含めて銅像制作に全力で取り組む所存です。」等と述べられ、参加者を見事に「銅像制作と寺田博士」の世界へ引き込んでいた。なお、大野さんは「門椿」「藤の実」「鞘」で「新制作展」の数少ない賞である「新作家賞」を平成 26 年度、平成 27 年度と連

続して受賞された。

台座の文字については、当初著名な書家のお名前もあがっていたが、最終的には地元の方に…ということになり、私たちは迷うことなく依岡稔さんにお願いをした。依岡さん（毎日書道展審査会員）は、長らく高知県教育界の牽引役を務めてこられ、退職後も子どもたちや多くの教職員に書の指導を重ねてこられた方であった。4年前には、ご子息の依岡隆児さん（徳島大学教授）に「寺田寅彦の文学的世界」と題する講演を友の会で拝聴したこともご縁であったかもしれない。「子どもたちにわかりやすい字を書こうかねえ」と静かに意気込みを語り、『ねえ君ふしぎだと思いませんか　寺田寅彦』の揮毫をすまされた後、平成29年10月15日に85年の生涯を閉じられた。柔らかな筆によって刻まれた文字が絶筆となった。

台座の右側には、寺田寅彦記念館の入り口にある牧野富太郎の書と伝えられる「天災は忘れられたる頃来る」を復刻することとした。左側には、寺田博士が活躍していた当時に流行していたローマ字の書（博士自筆）「好きなもの　イチゴ　コーヒー　花　美人　ふところ手して　宇宙見物」を、これも復刻することとした。

銅像の設置場所については、県市の合築の図書館「オーテピア」ができた時に、その敷地内へ･･･という希望を持つようになっていた。一つには新図書館が「科学館・プラネタリウム」を設置すると聞いていたことと、また博士が優れた随筆をたくさん残していること、そして寺田博士の母校である高知県尋常中学校（現高知追手前高校）を臨むことが可能になること等を考えて博士像の設置に相応しい場所であると考えたのであった。このオーテピアへの設置については、最終的には青木章泰会長と岡﨑誠也市長の話し合いで決まったように聞いている。

また、子孫の方々へもお知らせなどをしていたが、頭像の設置のこと等をお知らせしていた関直彦様（お孫さん）から次のようなお返事をいただき、事務局一同喜んだことだった。「お知らせをありがとうございます。9月にご案内をいただき、国立新美術館で催された『新制作展』の頭像を見に行きました。実物大、かつ写実的で、眺めると妙に懐かしい思いにとらわれました。素晴らしい出来ですね。寺田寅彦記念館に設置されるとのこと、良かったですね。」

最後に銅像について書いておきたい。高知市には、たくさんの偉人の銅像がある。その中へ、私たちの寺田博士の銅像が仲間入りをする。素直にうれしい。新しい銅像は、日曜市にやってきた人々によって「寺田博士とはこんなにすごい人だったのか」と口々に話されることだろう。そして「寺田博士ゆかりの地」を訪ねる人が少しずつ増えていくに違いない。そうした動きが静かに広がって、やがては「銅像めぐり」が高知の財産となっていく…。そんな夢を描きつつ、浄財をお寄せいただいた多くの方々に心からのお礼を申しあげ、この文を終わることにする。

制作者大野 良一様の講演　「寺田寅彦像を制作して」（配布資料より）

寺田寅彦像制作の依頼を受けてから、足掛け五年の歳月が流れました。そして今オーテピアの敷地で、追手筋に向かつた一等地に銅像を建てることができて大変光栄に思っています。建立までの経緯は、宮英司さんの「寺田寅彦銅像物語」に克明に書かれていますので、ここでは像制作者としての所感を述べさせていただきます。

彫刻家にとって、記念像制作の依頼を頂ける事はこの上なくやりがいのあることです。自分の作品が半永久的に展示されるのですから、誇らしくとても嬉しいことです。しかし、まかり間違えてまずいものを作ってしまえば、半永久的に汚名を着なければなりません。それは作家個人の責任のみにとどまらず、像になった人、それに携わった人にも、いいえその像を見ている全ての人々に取っても、悪い影響を与え続けます。これを彫刻家の大先輩、日本を代表する彫刻家佐藤忠良は「彫刻公害」と言っています。

最初に寺田寅彦先生の銅像の依頼を受けた時、大変気持ちの引き締まる思いをしました。それは自分の代表作と言えるような彫刻にしなければ、という思いからでもありました。

記念像は公衆の集まるところに建てられます。立派な人を顕彰する意味と同時に、その造形にも彫刻として美しいものが要求されます。それはその像でもって人々を感化したり、啓蒙したり、導いたりもするものです。

彫刻はその環境を広く支配します。彫刻は置かれた空間から見れば小さなものですが、持っている力は相当大きなものがあります。たとえば、桂浜公園の中心は龍馬像であるように思えます。中には高知県の中心と思う人も居るでしょう。上野公園は西郷さん、渋谷駅では忠犬ハチ公の銅像までもが、その環境の中心としてあるいはシンボルとしてイメージされます。無くてはならないおヘソのような印象を持ちます。

このように、人々に愛着を持って受け入れられ品格のある像であれば、公衆を導く大きな力になります。

肖像彫刻の品格について

肖像である以上は似ていることは大切なことですが、その似かたに品格の甲乙があると思います。只、形状を似せて「まあ そっくり」と言わせようとする技術に走ると、あのロウ人形のような気持ちの悪さに通じます。また格好良くお洒落に見せようとすると、鑑賞者に媚びて、絵本が立ちあがったような軽薄なものになってしまいます。ましてや客寄せの立体看板のようになることはもっての外です。

そこで私は、寺田寅彦の功績や人格までをも表現したいと思い、寅彦が恒常的にもって

いた顔つきや姿によって、不変性、永遠性を求めるべきだと考えました。

まずどんな姿にするか。当初はほとんど予備知識が無かったため、伝記や著書を読み始めました。

業績や人となりを知れば知るほど、私自身寺田先生の魅力に引き込まれ、また大きな教示を受けることにもなりました。「寺田寅彦記念館友の会」の方々にも相談して、色々なポーズや案を頂きました。

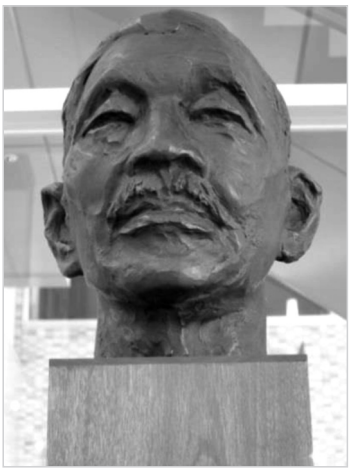
そうして試作を重ね最終的に、偉人であっても威張った像にするのではなく、「ねえ君 不思議だとは思いませんか」と問いかける身近で親しみのある姿にしました。手の平に乗るような研究から、宇宙相手の壮大な研究をされた科学者。俳句や随筆を著した文学者。音楽や美術にも造詣が深く、夏目漱石の小説のモデルにもなった人柄。このようなことの全てを像の中に閉じ込めたいと思いました。

頭像、顔について

顔は個人を特定する最も重要な要素です。勿論体つきにも個性や表情はあります。痩せ身の体、太りぎみの体の違いだけの上に、それぞれの頭がついても肖像彫刻にはなりません。例えば、龍馬は高価そうな着物をザックリと力をぬいて着ています。武市半平太は実直そうに背筋を伸ばした感じです。人斬り以蔵などは腰を落として殺気立った体つきにすると、面白い像になりそうです。

とは言え、だれもが先ず顔を見てその人物を判断します、顔の印象は肖像にとつて最も重要なところです。そこで私は試作を繰り返し四個の頭像を造りました。

最初に手掛けたのは、「寺田寅彦博士」として良く登場する、小金井のピクニックの写真です。文化人切手にもなっていましたし、江ノロ小学校のレリーフもこれだと思います。しかしこの頭像を制作してみて、この顔が全身像に付いた場合、少し軟弱な印象を受けはしないかと心配になりました。美女と一緒にピクニックという場面ではやむを得ないかと思います。



もう少し強い像にしたいとの思いから、寅彦自身が書いた「自画像」の文章や絵、そして色々な時代の写真をミックスして構成してみましたが、これは意志的になり過ぎて厳しさが際立ち過ぎました。

そこで、一作目と二作目で得たものから、両方の良い所を合わせ持った第三作目を造りました。これには納得がいったのでブロンズ像にしました。その折ちょうど、銀座のギャラ